小田原史談

第54号
発行所　小田原史談会
小田原市城内3—22
郷土文化館内

幻庵印判について

——宝泉寺文書から——

立木望隆

後北条氏時代の文書を読んでいると、幻庵印判、或は久野印判ということばがしばしば出てくる。

幻庵印判とは、後北条氏の長老幻庵北条長綱使用の印のことだが、この印判を捺した文書の内容などで見ると、当時の人々が、この印に非常な権威を認めていたようすがわかる。

或る時期では、虎の朱印に次ぐ重要性をおびたものとして扱ったらしい形跡だが、不幸にして私はしばらくの間、この印を捺した実物に会うことがなかった。

昭和三十四年だったか、東京の世田谷区で区資料をまとめて刊行したことがあるそれを区役所の隣りの勝国寺を訊ねた際拝見したがそこに収録されていた幻庵文書で、はじめて見ることが出来た。もちろん写真を通してのことだった。

その紹介によると、印判は形は丸、直径六・四センチ、印文は「静意」という「静意」をどう読むのか「せい・い」か「しずこゝろ」なのか、或は別の訓みくだしがあるのかいまもってわからずじまいだが、虎の印の「祿寿応穏」の意と一脈通うなにかがあるという気がした。

この幻庵印判（久野印判）を捺印した実物にめぐり会うことが出来たのは、じつは本年年頭にあたってのことで、しかも思いもかけず、すぐ足もとの小田原市内での発見であった。昨冬さいごの箱根郷土誌会の席上で、湯本正眼寺の岩崎正純師が、「風祭の宝泉寺に幻庵文書があるのを知っていますか、わたしも最近になって知ったのですが」と話し出された。もちろん私には初耳で「それは是非みたい、是非御紹介して下さい」と飛び立つような思いで頼んでおいたのが、この一月七日に実現したわけだった。

小田原うちには、もはや幻庵文書はおろか後北条氏史料はない、というのが史家の通念ときいていたのでついついうっかりしていたのである。

風祭宝泉寺については、その開基が北条時長ということで、じつは前々から注目はしていた。後北条氏関係のどんな系図にも見当らないこの人物を、私は、年代は多少さかのぼるが、上郡赤田村の八幡宮を享祿三年に建てた、関新三郎時長となにか関連がありはしないか、などと考えてもいたので、そのことについても確かめたかった。

開基の謎はついに解けなかったが、原宝泉寺住職の厚意で、貴重な寺宝のかずかずを拝見することが出来幻庵印判に初めて親しく接することが出来たのは、生涯の感銘となって残るところであった。

幻庵印判が、いつごろから用いられるようになったのか、いまのところ不明である。

箱根底倉村に伝わる文書に「……右之両条縦如何様之者有之申懸共、地下人出合間敷候、但虎之御印判、又幻庵印判於有之者、無々沙汰可勤之者也云々、天文十四年三月」とあるが、天文十四年（一五四五）といえば幻庵長綱五十二歳で、久野の館に住み、これより半月ほど前の二月二十六日には、この館へ一世の連歌法師谷宗牧をむかえて、朝風呂を馳走したり、連歌の会を催したりしていた（東国紀行）

底倉村文書の「虎の御印判か、又は幻庵印判之れあるに於ては」の一文で、当時の幻庵の占めていた位置の重要性をはっきり知ることが出来るが、この文書などが、印判の用いられた上限になるのではないかと思う。

後北条氏二代の氏綱は、天文十年七月十九日に五十五歳で逝くなった。北条氏を自ら名称ったのは、この人が初めてであるが、このころ後北条氏は、武蔵を抜き、安房上総を制しさらに上州への地歩を固めようという勢いであったが、ようやく三十代をむかえようとしていた三代氏康を援けべく、一門の要請で幻庵長綱は、箱根権現別当第四十世を辞して還俗、久野の館（幻庵屋舗）に居住して、政治文教の采配をとることとなった。

幻庵印判が起ったのは、このころを時点としているのではなかろうかと思う。

（昭和四四年一月廿七日）

丹那トンネル秘話

――大崩壊当時の思い出――

額田喜代春

四十八年前、当時私は小田原駅に於て、初代駅長杉田武造氏の下で駅長秘書として働いていた。

大正十年四月一日午後五時頃のことである。退庁準備をしていた時、丹那トンネル東口の大崩壊を知らされた。「やったな」と思ったが、技術者でない私にはどのような事故であるか想像もつかない。後報を待つばかりである。

後に漸く判明したことの大要は次の如くであった。

当時鉄道工業が請負っていたので、同工事詰所では直に、遭難対策本部が設けられ、救出作業が開始されたが、この事故について現場の監督官庁である、熱海線建設事務所から鉄道省（運輸省の前身）に報告されたが概要は次のようであった。

㈠、崩壊当時の状況

大正十年四月一日午後四時二十分熱海線丹那山隧道（のち丹那隧道と改称された）東口国府津起点十七哩五十五鎖五十節穿拱煉化石積完成終端（坑門口より九百五十呎）より内部に於て俄然崩壊し、支保工拱架並に足場を潰倒して、木材並に岩片は同哩五十四鎖八十節付近まで堆積して、従業員建築工夫長細川治平外三十二名を埋没或は閉塞するの惨状を呈するに至れり。

たまたま煉化石積準備中の大工田端茂一は拱架に在りしも、倒潰と共に投げ出され、コンクリートとろ押しの真壁徳三は重積せる木材中より血塗れとなり這い出せしは、真に幸運児であった。

㈡　崩壊当時の作業状況

陥落当日は朔日（ついたち）のため、従来の慣習の如く（一般に一日及十五日は休日にしていた）入坑者は例日に比し少なく、且つ午後は圧気機修繕のため、一時送風を中止するの必要があったので、さく岩夫は正午より午後六時までの当番は、作業を休止し、また十八哩二十七鎖付近の底没百五十呎）より内部に於て導坑に於て、支保工組立のため、建築工夫一名並に、号令、斧夫（さきさし）人夫等七名は、作業しておったが、午後二時に仕事を終へ、出坑し尚十七哩五十七鎖付近に於て、第三桂及び七ノ桁（丹真以下）組立のため、建築工夫一名と斧夫四名が従事して居ったが、午後三時頃終業の上、出坑し且つ十七哩五十五鎖五十節より十七哩五十鎖〇節間のセントスル検査のため、田端某会社員外一名入坑したりしも、午後三時時終了したので出坑せしをもって、崩壊当時に於ける坑内作業は、十七哩五十六鎖〇節より、十七哩五十六鎖四十節間の左側壁のコンクリート並に、十七哩五十七鎖より十七哩六十六鎖間に亘る、ズリ搬出作業を主なるものとし、他の者は下水掃除、坑内の見廻り、並に煉化積準備作業等に従事せしに過ぎざりしをもって、遭難者は比較的に僅少なりしは不幸中の幸であった。

㈢　遭難者氏名左の如し

建築工夫長細村治平外三十二名

（他は省略）

救助本部では直に、東口の全従業員を召集すると、それぞれ部署を定めて入坑しまず散乱している木材やズリの取りかたづけから着手した。救助作業は夜になってもつづけられた。小田原の熱海線建設事務所からも技師がやってきて全員を督励し、翌朝になると、西口つまり三島口隧道工事で働いている作業員たちも、大勢応援にやってきた。

なお鉄道工業が熱海線建設事務所の報告書その他をまとめて編集した「熱海線丹那隧道一部崩壊記事」をみると次のように書いてあった。

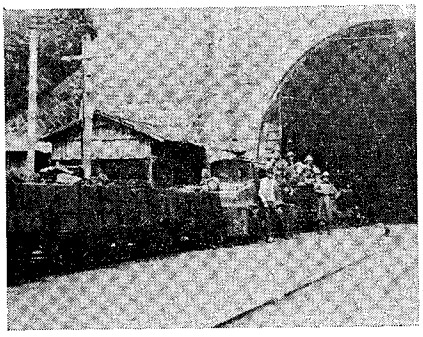
「陥落の報に接するや直に従業員全部を召集し、部署を定め、埋没者を救助するの目的をもって、即時散乱せる木材並に岩石を取り片つけ、午後七時半、中央下部の仮下水上部に沿うて、一ケ所及左側壁に沿うて、一ケ所の坑道開さくに着手し、午後十一時半、右側壁上部に沿うて、尚一ケ所坑道の開さくに着手するを得たり、しかして翌二日朝、危険を冒して中央部上部に尚一ケ所の坑道を設くることに決し、西口請負人鹿島組より、応援し来れる者及び、同組より熟練なる斧夫（さきさし）を選抜召集し、之に当らしむることとし、開さく作業に着手したるは同日午後一時半であった。

（後　略）

当日午後八時半頃になって送風管をたたき、坑内に向って又は、鉄管に口をあて大声にて呼び、坑内奥の生存者に通信を試みても、或は崩壊箇所付近に前以って埋めてあった鉄管の屈曲部に長さ十五呎の装甲ゴム管を使用してあったので、このゴム管が遂落した木材等に圧迫されたためか、または他に損傷が出来たのか、再三に亘り通信したるも、応答がなかった。（中略）

これではせっかく生きている者がいたって死なしてしまう。

「もっとスピードをあげろ」と所長は躍起になって陣頭指揮をするが人力には限りがあった。三日目になってやっと、とりよせたアセ



昭和8年4月25日（完成の前年）丹那トンネル見学の際，東口入口にてズル運搬車上左から2人目筆者

チレンガスの切断機が届いた。「これさえあれば大丈夫だ」と作業員は勇気百倍した。

なお左側に救助坑道を掘り進め、又、右側にも救助坑道を掘り進めたが、坑内は華氏八十七度の高温で圧縮空気を送ってもらって、やっと息をつくという有様で、救助作業は困難をきわめた、しかし人夫達は仲間を救出するのだと、意気込みもちがって、泥土との苦闘は涙ぐましいまでの、努力がはらわれたが、その努力がむくいられて、八日午後十一時に遂に百四十九呎まで進み、ついに貫通したのであった。

（中略）

「おう、貫通したぞ、救助坑が貫通したぞ」といって、皆「わあッ」と叫んだというが、八日間も生と死をさまよっていた人々の、気持がわかりますね。そして八日間も暗黒同様の坑内で生活した者が、急に明るい外光に触れると、眼底障害をおこすというので、皆あり合せの布で目かくしの用意をさせた。

「おうみんな無事だったのか」「よかったなあ、よかったなー」と狂気のあまりあとは、絶句して救助隊と遭難者たちは、手をとり合った。最初坑内に入った、救助隊の坑夫達の中には、ひげぼうぼうで、髪は乱れ、全員目かくしをした鉢巻姿で立ちあがったので、「おばけだー」とびっくり仰天したものもあったというが、よくわかる気持がしますね。

そして救助隊は「野郎どもしっかりしろ、今日は遭難してまだ三日目だぞ」とうそをいって、元気づけたという、そして年よりから先に救助した。それから救出されて、三日目の四月十日の朝、十七人の生存者は、おかゆを一椀または二椀、梅ボシ一箇、牛乳百ミリグラムと共に給された、それから煙草をのむことを許され、食後の果物として、みかんもついていた、これまではオモ湯ばかりだったから、オカ湯の入った茶椀をみると、みんな目を細くして、ニッコリしたという。

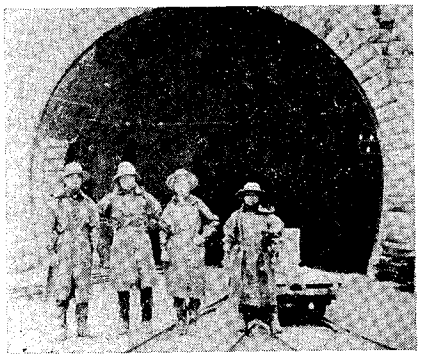
「おれは生れて、このかたオモ湯なんて、のんだことはない、早く固いめしを食わせろ」と不平をこぼしていた連中も、オカ湯をみると、ほおの筋肉をゆるませて、舌なめずりをしたという。

なかにひょうきんな者がいて、「おい、オカ湯は固いめしじゃないが、それでもいいのか」と茶目気を出して、からかうと「固いめしの茶漬けと思えば、がまんできますよヘッヘッヘー」と悦に入って、早速一椀のオカ湯に生卵をかけてすすったという。

それから、たれがいうことなしに、こんどの遭難を記念してというのは、おかしいが、なにか有意義にする方法を考えては、というので全員が簡易生命保険に加入したという。

山岳の多い日本では、鉄道の発達史はトンネル掘さくの歴史ともいわれ、従って数多くの哀悲や困難が伴ったもので、丹那トンネルの如きは、その最たるものであろう。

丹那トンネルは大正七年四月一日に起工されてから、昭和八年十月一日に坑内で貫通式を行い、昭和九年十二月一日に完成されたのであるが、その間最初は七年の工期と、七百七十万円の予算であったが、幾多の困難と前後六回もの崩壊事故等に遭い、六十七名もの犠牲者を出し、十六年歳月と二千六百万円の巨費を費し工事に従事した人も延にして二百五十万人（一日平均五百人）で遂に、七千八百四米のトンネル（当時は日本で二番目）が完成されて従来の熱海線は東海道線と改称され、従来線の御殿場線に比べ、特急で十五分。普通急行で三十分乃至四十分。貨物列車で五十分乃至八十分の短縮と輸送方も約二倍半に強化されたのである。（筆者元国鉄職員）



右同入口に於て，防水用カッパを着用して見学終了後記念撮影したもの（右から2人目筆者）

大鳥別荘と御手植松

内田武雄

今の小田原国府津親木橋のそばに、私が子供のころまで大鳥啓介公の別荘があったがその後大津波の後は岡の山の中腹に移ったのである。当時大鳥啓介と言へば、日清戦争で有名な敵将李公承を相手どった外交官であった。私たち子供のころのうたに、李公承のはげ頭、負けて逃げるはちゃんちゃんぼ、などとよく歌ったものです。又大鳥を小鳥と見たか、李公承、などと言った言葉も残っている。

時は明治二十九年三月卅日大鳥公の別荘にたまたま遊びにおいでになっておられた常宮様と周宮様が、お付の方をしたがえ国府津から人力車に乗られて下曽我の城前寺においでなされたその時お二人の方々が松の苗木をお寺の入口に二本植えられた、この二本の松は今でもすくすくと大きくなっている。その根本に常宮、周宮両親王の御手植の松そのわきに大鳥啓介書と記した記念碑が今でものこっている。この御手植の行事が終った後の両親王様はこれからはレクレエッションと今の小田原市田島の冷田川でシジミ貝取の遊をされた。

とつぜん人力車でお二人のおいでに村中大さわぎ前々より、シジミも俵に入れてこの川にはこばれて、これがばらまかれていたのでお二方は大いによろこばれて無事人力車で大鳥別荘にお帰えりになった。それから七十三年後の今日、この両親王のシジミ取りの場所も御殿場線電化の引こみ線のためついに消らぜる時がきたのである。

四十四年度小田原史談会役員名簿

名誉会長　鈴木十郎　早川二四八
会長　中野敬次郎　南町二・二・一五
副会長　立木望隆　久野一五九〇
〃　内田武雄　高田一六二
〃　額田喜代春　南町二・四・二〇
名誉会員　峰　堅雅　飯泉観音
〃　落合信一　国府津一六四一
〃　難波　明　南町四・一・一六
〃　井上英一　栢山三三一〇
〃　清水専吉郎　栄町一・八・九
参与　中井一郎　石橋二四三
〃　酒井忠次郎　荻窪三二八
〃　山口武利　早川二六二
理事　勝野憲一　南町二・一・一五
〃　佐々木金治　栄町二・一・一九
〃（監事）杉崎正五　田島七四八
〃　東海俊美　南町一・五・三〇
〃　橋本庄平　板橋九四
〃（会計）広沢伊助　本町一・一〇・一七
〃　山崎益太郎　久野坊所
〃　加藤誠夫　南足柄町関本五八四
〃（監事）岩田忠介　南町一・三・四
〃　小林泰助　栄町二・二・六
〃　杉山米吉　浜町四・五・一
〃　杉山康輔　浜町一・一・二四
〃　井上宗　南町三・二・四九
〃　山室定雄　池上二九
〃　小沢寛一　栢山八四七
〃　後藤浅義　谷津一七
〃　小西哲夫　南町四・二・六
〃　岩下良平　南町四・一・五八
〃　宇野応之　浜町一・四・三
〃　岸　達志　久野東泉院
〃　安井常助　浜町三・一・三六
〃　三津木国輝　飯泉三六四
〃　神田太郎吉　曾我原一七九
〃　香川政治　飯田岡二七八
〃　新居善作　栄町三・一二・九
〃　星野喜久雄　井細田四〇〇
〃　尾崎正　本町三・一二・二六
〃　斎藤喜代治　中里一八〇

幸町・万年町地区史跡めぐり

一、日時　六月二八日（土）午後〇・三〇郷土文化館前集合　午後一時出発
二、コース　郷土文化館〜御幸浜通り〜円福寺（マリヤ観音像、狂歌師紀　軽人墓、鏡信一刀流八代林嘉蔵墓）〜福田寺（延命地蔵）〜無量寺（十一面観音像、徳川家康座木像）〜代官町〜千度小路〜徳乗院（小田原の大仏）〜宮前町（大清水本陣跡、宮の前聖跡）〜宮小路〜松原明神社（大久保忠世画像、靖献碑）〜唐人町（北村透谷誕生跡）〜古新宿町（鍋町、鋳物家柏木工場）〜北条稲荷

津久井・八王子方面史跡めぐり

期日　七月六日（日）午前八時郷土文化館前集合　午前八時三〇分出発
コース　小田原郷土文化館前〜風祭〜厚木〜中荻野（桝割）山中城址〜田代〜三増（三増合戦遺跡）〜田代〜半原、中津渓谷〜韮尾根〜三ケ木〜中野〜股野尾崎記念館〜寸沢嵐（寸沢嵐敷石住居跡）〜相模湖町（与瀬）相模ダム相模湖（昼食）高尾登山口〜ケーブル薬王院〜八王子市横川、下原鍛冶遺跡、武蔵太郎安国墓〜城山下、八王子城跡、北条氏照墓、宗開寺〜八王子中央通り〜橋本〜相模原〜厚木〜平塚〜小田原

新玉町史跡めぐり

六月一日　広沢十五夜

武士道を守り通して自刃せしか
墓石は初夏日にぬくげなり
路地の奥にさびれて建てる観音堂
かつては抹香にむせぶほどとぞ
秘仏の扉ひらかれしとき窓外の
明りとどきて御肌色ます
北条の興亡語る土塁あり
史跡とおみて去りがてにいる
東海道の一里塚こゝにありてぞ
大榎まさに眼底に顕つ

編集室から

小田原地方に中心をおいて下さい。（立記）

最近会報への御投稿が活発で、うれしい悲鳴をあげています。
そこでお願いですが、紙数の都合もあって出来るだけ八枚以内にしてほしいと思います。
小品随想、ききがき、なんでも結構ですができたら、